

## 投稿

# 幕臣の大義に生きた 天才剣士伊庭八郎

神奈川県歴史研究会会員 竹村 紘一

天保十五年に心形刀流八代目伊庭秀業の嫡男に生まれ、八郎治、諱を秀<sup>ひでさと</sup>穎。父・秀<sup>ひでなり</sup>業は老中水野越前守忠邦の推挙によって御留守居与力に取り立てられた直参旗本だが、八郎が幼少の頃、水野の失脚で職を辞し三十五歳で隠居。弘化二年、高弟の秀俊を養子に迎え九代目家督を継がせる。安政三年の幕府講武所創設の折に秀業は指南役拜命を辞退、秀俊を推挙し出仕させた。

心形刀流伊庭秀業の練武館は北辰一刀流千葉周作の玄武館、神道無念流斎藤弥九郎の練兵館、鏡心明智流桃井春蔵の士学館と共に江戸四大道場と謳われたが、同五年、秀業が死没、実子・八郎は若年の為、九代秀俊の養子となる。実父が義理の祖父となったのである。八郎は実父、養父の薫陶を受けつつ幼少より儒家長谷部旅翁に素読、市河米庵に書を学び、練堀町の宮崎塾に漢籍を修め、講武所へ入り、剣の腕では「伊庭の小天狗」と呼ばれる文武両道の青年に成長した。ある本によると幕末に剣技に秀でた人物に四八郎と呼ばれる人がいたという。すなわち、

北辰一刀流・清河八郎（尊王攘夷家、新撰組前身の浪士組創設者）

北辰一刀流・井上八郎（山岡鉄舟の初期の剣術の師。遊撃隊頭取、歩兵奉行）

直心陰流・天野八郎（彰義隊副頭取）

心形刀流・伊庭八郎（講武所剣術方、奥詰、蝦夷共和国歩兵頭並遊撃隊長、）

八郎を評した人によると「白哲美好、清秀なる中に和気あり、性質快闊慷慨淋漓たる好丈夫。詩

をも歌をも作り最も軍記物語を好み水滸伝の如きは大概諳んじた」（「香亭遺文」）

「色白ニシテ温雅所謂眉目秀麗俳優ノ如キ好男子ナリ。共ニ英語ノ会話篇ヲ読ム」（「英学史研究」高梨哲四郎書簡）「極く優しい美男子で背も高い方ではありませぬでした」（田村銀之助）らがある。

元治元年、養父・秀俊と共に將軍上洛に随従した八郎は、講武所剣術方、次いで奥詰として以後もしばしば十四代將軍家茂警護に従い、年代の近い若き將軍から信頼を寄せられ、褒詞を賜っている。石高三百俵十人扶持という下士であっても、將軍を守る大任と名誉に預かるという直参の誇りは大きな励みにもなり、後年十五代慶喜の恭順後も徹底抗戦に出た行動に影響を与えたのであろう。

八郎が書き遺した『征西日記』によると、上洛中の八郎は任務の合間には名所旧跡を散策して鰻や鴨に舌鼓を打ち、想いを寄せる人へ扇の土産を買う等、束の間の幸福な日々を過ごしたと伝わるが、池田屋事変の混乱で江戸への帰途を急いだとされている。

幕府は長州再征後の慶応二年秋にフランスの指導を得て軍政を大改革し、十月二十二日奥詰槍術隊、講武所詰等を銃隊に編成して遊撃隊と称し十一月十八日の陸軍所合併をもって講武所を閉鎖した。

慶応四年一月三日に開戦の鳥羽伏見の戦において、八郎は遊撃隊として出陣、鳥羽街道で薩摩軍と交戦し奮戦する。その奮戦振りは、薩摩の勇将野津道貫（後に元帥）が激賞したと伝えられる。甲冑の上から胸に被弾したが奇跡的な軽傷で助かっている。

江戸に戻って後、四月十一日の江戸開城と共に八郎ら遊撃隊士三十六人が脱走。榎本武揚の幕府艦隊に投じたが、榎本は幕府の構想の下、脱走を思いとどまった為に袂を分かち、木更津に上陸。かずさじょうざいはんしゆ はやしまさのすけただたか さぼく上総請西藩主・林昌之助忠崇に佐幕を説き、新たに遊撃隊を結成。二百余名を率いて相模国真鶴に上陸。五月十七日に上野彰義隊が新政府軍と戦火を交えたという報を受けた遊撃隊は沼津に至り官軍の後方を衝こうとして一時は箱根の関を占拠した。

箱根の関門を占拠し、小田原藩と同盟を結ぶものの、新政府軍を恐れた小田原藩（藩主は徳川譜代の久保氏）が同盟を破棄し湯本で戦闘になる。当時の小田原藩の藩論は二転三転していたのである。この時、小田原藩に出張中だった八郎は、譜代の雄藩であるにも拘わらず、反覆常ない小田原藩の姑息な態度に腹をたて、「反復再三、怯懦千万、堂々たる十二万石中、復一人の男児なきか」と痰呵を切ったと云う。

箱根山崎の戦闘中、八郎は湯本三枚橋で左手に重傷を受け敗退。左手首が半ばぶらぶらしており手当の者が処置に困ると、麻酔も無しに切り落として声も上げず熱海より海路にて品川沖の病院船の旭丸へ向かったとの『三国志』の豪勇関羽を想起させる豪胆振りが伝わる。やがて、八郎はこの重傷によって八郎は戦線を離脱せざるを得なかったが、八月十九日、旧幕艦隊北走の折、みかほ美加保に乗艦。しかし銚子黒生浦で遭難、上陸後は上総中島に潜伏。この頃すでに会津は落ち、八郎も旧幕軍を追うべく十一月二十五日に横浜を出航し、箱館に到着。榎本武揚の旧幕脱走軍に参加した。その後十二月三日に箱館を立ち、松前駐屯中の遊撃隊に合流し、旧幕軍蝦夷地政権の歩兵頭並となり遊撃隊隊長に任命される。元号は明治となり、江戸は東京と改称したが、旧幕府将兵は尚も抗戦を続けていた。

翌明治二年春を待って新政府軍は蝦夷共和国掃討の為襲来。四月十七日、海陸官軍の猛攻により松前が陥落。折戸台場に殿軍の遊撃隊は隊長岡田、

頭取本山以下多くの犠牲者を出す。翌日より隊はざつかり札刈、次いできこない木古内へ転陣、おとべ乙部上陸後、上ノ国から間道を進んだ官軍の一軍は、四月二十日早朝大挙して木古内を攻撃。これに対し遊撃隊、額兵隊（幕末に仙台藩で創設された洋式銃隊で最後まで幕府側で奮戦した）を中心とする脱走軍は激戦の末に敗走する。この戦いで八郎は胸部に敵弾を受ける重傷で、泉澤より小舟で箱館へ送られ、病臥していた。

五月十一日、遂に箱館総攻撃を迎え、陸軍では元新選組副長で歴戦の勇将土方歳三が一本木関門にて戦死し、海軍も敗れ、榎本軍の敗色は決定的となり、後は恭順か自決かという決断を迫られるのみとなった。生きて虜囚の辱めを受けずの風がある時代である。八郎には死あるのみであった。一説には榎本自ら重篤の八郎の病室を訪れ、「我々もすぐに行くから貴公は一足先に行ってくれ」と一杯の毒（痛み止めのモルヒネとも云う）を入れた茶碗を差し出すと、八郎は笑って綺麗に飲み干し、間もなく眠るように息を引き取ったという。大悟徹底覚悟の上のことであったことであろう。時に五月十二日、享年二十七歳。徳川家への忠義に生き、「伊庭の小天狗」、「隻腕の美剣士」と称された剛直の士伊庭八郎の短くも雄々しい生涯であった。辞世と云われるものに次の歌が、著作に『伊庭八郎征西日記』が遺されている。横浜潜伏中の作とも伝わる。

まてよ君 迷途（冥土）も友と 思ひしに  
しばしおくるる 身こそつらけれ

八郎の墓は東京都中野区沼袋の貞源寺にあり、法名秀穎院清誉は一居士。

余談ではあるが、明治三十四年六月十四日、八郎の弟・伊庭想太郎が紋付の羽織袴姿で東京市庁に現れ、元逋信大臣で東京市政の実力者であり疑獄事件にも名を連ねたほしとおる星亨を所持した剣によって

刺殺。想太郎は徳川育英会の幹事でもあり東京農  
学校校長を務めた程の教育者であったが、「星氏  
の行為は実にこの江戸主義に反し、許すべからざ  
るものと信じたれば、江戸の土風を改むるにしか  
ず」と供述している。また、刺殺後、天下のため

であると怒号し、斬奸状を読み上げたという。無  
期徒刑となり小菅に収監中に胃癌にて病死した。  
「隻腕の美剣士」 八郎を生んだ伊庭家の剛直にし  
て苛烈なる血筋を物語る後日談である。